◆世界言語学名著選集◆

第2巻

言語学史

トカセン著・宋世文訳・高谷信一著

江苏工业学院图书馆
藏书章

昭和十二年七月二十日印刷
昭和十二年七月廿五日發行

正價 金壹圓五拾錢

譯者 泉井久之助
高谷信一

發行兼印刷者 八坂淺次郎
東京神田駿河臺
京都寺町丸太町

弘文堂印刷部

發行所 東京神田駿河臺
振替東京五三〇九番
電話神田二七五二番
京都寺町丸太町
振替大阪一七〇五番
電話上二〇〇九番

弘文堂書房

譯者の序

本書は言語學者として令名があり、殊にオルホンの碑文の解讀によつて我國の東洋史家の間には古くから知られてゐる丁抹のヴィルヘルム・トムセン VILHELM L. P. THOMSEN（一八四二—一九二七）の《Sprogvidenskabens historie, En kortfattet fremstilling af dens hovedpunkter》の飜譯である。原書はトムセンが言語學の一般講義の一部として屢ゝ講じてゐたものを取まとめて、一九〇二年、丁抹國王の天長の佳節に因むコーペンハーゲン（キョヴンハウン）大學の年祭の記念刊行論文としてはじめて公にされたもの（丁抹の有力な學術的著述はこの形式の下に公にされたものが多い）、刊行の當初から西歐北歐に多くの反響があつた事は、當時の言語學關係、批評關係の雜誌の多くに取上げられてゐるところによつて窺ふことが出來る。後、一九一九年以降、トムセンの全集 Samledc Afhandlinger（嚴密には選集であるが）が愈ゝ出版せられ始めた時にあたつて、その第一卷の首篇に採錄せられた。本文においては新舊の兩版に差異は認められないが、脚註においては、十年あまりの學界の進展に添ふべく可成りの增補が施されてゐる。我々は本書を譯出する

に當つては全集版を用ゐた。

トムセンの言語學史が、今、丁抹以外において廣く知られ、利用せられてゐるのは、主としてハンス・ポラックの手になる獨逸語譯（一九二七）によつてであり(Geschichte der Sprachwissenschaft bis zum Ausgang des 19. Jahrhunderts, übersetzt von Hans Pollak)、我々としてもこの好譯書を常に利用することを忘れなかつた。獨譯者は著者の生前に種々問合せをすることも出來、譯書としての權威はそなはつてゐるものと見なければならないものであるが、しかし譯書として獨逸の讀者に迎へる必要上、細部の、勿論重要ならざる箇所において數個の變改が加へられて居り、同じ理由によつて原書の本文を削つてこれを脚註としてゐるところも一箇所（本書七七頁參照）ある。我々の譯書においては出來得る限り全集版の原書の形式に從つた。――この獨逸語譯には稀に誤譯と覺しきものもあつて、例へば獨譯書一三頁・一五頁には、原文の orden（「順位」）なる語を、ord（「語」）の複數形と混同したものか、何れも „Wörter“ と譯されてゐるのが見られる。しかし ord は複數においても形に變化はなく、定冠詞を取れば單數において ordet, 複數において ordene であつて、何れにしても普通は orden となることはない。その箇所は「語」と譯しても前後の脈絡は一應通ずるが如くであるにもせよ、もし然るときは原書にお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けるかかる場合一般の用語例より見てむしろ mayn の語が用ゐられたであらうと思はれるためのみならず、論の本旨に適はず、殊に一三頁の場合は文法上の一致を破るが故に、これを誤譯と認めて、我々の解釋に從はざるを得なかつた如き。——

原書がはじめて刊行せしめられてから三十年以上にもなり、全集中に採錄せられてからも既に十五年にあまる歳月が流れてゐる。言語學の如く、專門の學問として發達したのが遲く、現在においても常に新しき分野を目指して進み、また進まなければならない學問においては、この年月は決して短い時間ではない。新しい發見、新しい解釋が蓄積されてゐるのも既に相當の量に上るであらう。譯者らの如き菲薄な知識を以てしても、一々註をつけ補訂を加へてゆくならば、その多きにむしろ困惑する位である。事實、我々ははじめそれを試みた、しかしあまりに註の多いことが、自然、略史としての本書の體裁を破り、本旨に悖るに至らしめたことが、我々をしてこの試みを抛棄せしめた。のみならず著者自らが再錄にあたつても本文に手を加へなかつた程の本書の「まとまり」とその高さが、我々のあらゆる試みを末梢的また無價値ならしめ、我々の暴擧の大部分を許容しなかつた。しかもこの文獻はすでに非常に古いのである。この意味においても、本書は 叙述の有機的な、所謂名著であり、また既に一個の古典であると云ふことが出來る。我々

の補註は最小の部分に止めざるを得なかつた。本書はもともとその著者を偲ばしめる視野の廣大と取扱の正確を以て知られてゐるのであつて（《un exposé…fait avec la largeur de vues et la sureté qui caractérisent l'auteur》—Meillet）、我々は本書において近世の言語學に至る有機的自然的の展開を最も明らかに見ることが出來る。尙、「譯書の後に」を見られたし。

この譯書は、はじめ高谷君がコーペンハーゲン大學の當事者の許可を得て、重要な最近世にあたるころ八二頁以下を譯了し私に寄託して置かれたものに、私が近古までにあたる部分を補譯して成つたものである。印刷に附せられる前に、寄託された責任上、私は全集版によつて双方の部分に忌憚なく檢討と加筆とを施した。從つてこの譯書における非違は、校正索引と共にすべて私の責任である。なほ先輩諸氏並びに友人服部英次郎君、及び弘文堂主八坂氏より多大の援助を出版に關して得た事を記して、感謝の意を表したい。

京大研究室において

泉井久之助

一九三五年九月（一九三七年七月）

本文と註とに拘らず、我々譯者らが附加したところは大小となく〔〕の印を以て圍んで置いた。我々の手によらない〔〕の箇所はすべてその出自を斷つて置いた。（）は殆んど原文よりのものである。

凡　例

○「世界言語学名著選集」は、二十世紀の言語学史を辿る上で貴重と思われる国内・国外の著作を選び、海外で刊行されたものに関しては邦訳版を、国内で刊行されたものに関しては初版本を復刻集成したものである。

○構成は次の通りである。

第1巻　美学〔世界大思想全集46〕（ベネデット・クローチェ著　長谷川誠也・大槻憲二訳　一九三〇年刊・春秋社）

第2巻　言語学史（ヴィルヘルム・トムセン著　泉井久之助・高谷信一訳　一九三七年刊・弘文堂）

第3巻　言語の構造（泉井久之助著　一九三九年刊・弘文堂）

第4巻　言語民族学〔新学芸叢書〕（泉井久之助著　一九四七年刊・秋田屋）

第5巻　言語と人間〔哲学叢書〕（ヴィルヘルム・V・フンボルト著　岡田隆平訳　一九四八年刊・創元社）

第6巻　言語理論序説〔英語学ライブラリー41〕（ルイス・イェルムスレウ著　林栄一訳述　一九五九年刊・研究社）

第7巻　言語学の問題と方法（ヴァルター・フォン・ヴァルトブルク著　一九七三年刊・紀伊國屋書店）

第8巻　ことばの不思議（ウォルター・ポルツィヒ著　金子亨・諏訪功・野入逸彦訳　一九七三年・白水社）

○第2巻のみ115%に拡大して収録し、他の巻は原寸にて収録した。

○この度の刊行にあたり、再録を御許可下さった各機関・関係各位に深く謝意を表する。

目次

譯者序
言語學史……一
索引……一八五
譯書の後に……一九三

言語學史

——その主要點を辿りて

十九世紀末に至る

人間に於けるすべての生活示現の中、言語はあらゆる時代において最も不可思議な存在であつたといふことが出來るであらう。言語によつて、人間は考へるところの理性的存在として、自らを他のあらゆる存在から區別することを最も直接的に知り得たのみならず、同時にその無限に柔軟な多樣性のゆゑに、時間的空間的に種族や社會を種々な民族的團體（nationalitet）に統合或は分割するあらゆる現象に關して、その最も明晰な表現となつてゐるものもまた言語である。全體的に部分的に、言語ほど人の探究心を唆る對象は殆んどなく、これほど人に探究せられた長い歷史を持つものもまた稀である。この探究の歷史——最初のたどたどしい始まりから今十九世紀末の高度に發達した科學に至るまで——に於る主要な點について、私はこの後の頁に、簡單な鳥瞰を試みたいと思ふ。しかしまづ斷つて置かなければならないのは、この試みもここでは單に太い

荒い線でしか行はれ得ないことであつて、私はただ一般的言語觀察が時の變遷の間に種々提示した主なる相、觀點、またこれらの上に特に自らの足跡を印した人々についてのスケッチを試みたいと思ふのみである。

言語の神祕が人々の思想を搖り動かし、如何にして言語と言語の多樣性とは發生したか、或は、一體如何にして物象は種々な言語においてそれぞれの名を得たか、これらの疑問に彼等が答を發見せんとして種々努力を重ねた事を示す最初の痕跡を、我々は隨分古くから發見するのである。その證跡として例へば既に舊約聖書の初めの諸章（創世紀一の五・八・一〇）には、「神光を晝(jōm)と名け、暗を夜(lájil)と名け給へり」(五)、神はまた「蒼穹」を天(šāmájim)と名け、「乾ける土を地(éres)と名け、水の集合るを海(jammīm)と名けたまへり」。——全く別の考が二章一九—二〇節の根柢に横はつてゐる、「ヱホバ神土を以て野の諸の獸と天空の諸の鳥を造りたまひてアダムの之を何と名るかを見んとて之を彼のところに率ゐいたりたまへり、アダムが生物に名けたる所」。神みづから自然の大現象にそれぞれの（ヘブライ語の）名を與へたまふたとする第一章（エロヒスト elohisten）と、人間アダムが生物に名けたことになつてゐる第二章（ヤーフヴィスト jal visten）との相違は、事實上この問題に對する異なれる二つの根本觀念を示すも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

のであり、希臘の――そしてほゞ二千年を隔てて再び近代の――哲學者の間に亦この問題をめぐつて起つた爭ひも、要するに之の並行現象であることを我々は後に見出すであらう。言語の問題を明瞭にせんとするかくの如き努力は、例へば(創世記二章二三節) iššāh「女」なる名詞を iš「男」から、或は(三章二〇節)イヴ(Ḥavvāh)を「あらゆる生ある(ḥaj)ものの母」として、由來付けんとする等の多くの語源的説明の中に見出され、また「全世界を通じて」行はれてゐた一個の言語に易つて、その後かくも多種多樣の言語が如何にして發生したかを説明するための、元〻多くの神話の交錯に基いてゐるに相違ない、例の素朴なバベルの塔の記錄(一一章)にも見出す事が出來る。

(一) テンネル、「思想に對する言語の力」Es. Tegnér, Språkets makt öfver tanken, Stockholm. 1880 一一頁參照。〔エロヒスト――「エロヒム資料」、ヤーフヴィスト――「ヤーウェ資料」〕。

この種の問題に從ふことが人間精神にとつては常に魅力であつた事を示す徵證を、同じ樣の他の文獻から援用するのは、固より困難なことではない。しかし何れにせよ、ここから一の「言語學」に至るまでにはなほ巨大な一歩が殘されてゐる、しかも我々が今、舊約聖書にあらはれるやうなナィーヴな思想に特に筆を費したのは、單に人間精神のかかる努力の表現の幾つかをここに見出し得るが爲ばかりでなく、これらと同じ思想が、遙か後の段階に於て、言語學の發展上宿命

的な影響を及ぼすことになつた事實に、後程說き及んで來るであらうからである。

しかし今述べた如く、ここから一の言語學までに如何に巨大な一歩が殘されてゐたにもせよ、この一歩は早くも古代を出でない中に、二つの地において、相互獨立的に且つ相互に著しく異なる條件と形式の下に、踏み出されたのであつた、卽ち一方印度人の許に、他方では希臘に於て。

印度人の言語學は、起原的には、古い神聖な讃歌の吠陀（ヴェーダ）、殊に梨具吠陀に從事するところから始まる。阿育王（アショカ）（略〻前二五〇年）以前の印度の紀年の常として、いつの時代にこの讃歌は出來たかは、全く分らない。しかしその最も古い部分は、大體紀元前一五〇〇年より甚しく新しい時代のものとは考へることが出來ないやうである。時の經過するうちには、實際に語られる言語とこの古い詩語との間隙は次第に深くなつて、遂に詩語は多くの點において理解出來なくなつて來たのは當然の成行きである。他面にはまた、神聖な讃歌を出來るだけ正確に、單にテキスト自體に於てのみならず、各〻の詩句、詩句中の各〻の音節の發音と誦讀との最も微細な點に至るまで確實に傳へることは同時にまた最も重大な問題であつた。讃歌の宗教的意義、讃歌の神々に對して持つべき功德は、一にこれにかゝつてゐたからである。この傳承のためには信ずべからざる程の多くの努力と研究とが拂はれ、しかもすべての傳承が全然、或は殆んど全然、口頭において行はれ

ただけに、その必要は益ゝ大きく、從つて齎らされた結果は勿論非常な忠實さと正確さであつた。[一] 古い歌を正しく傳へ正しく解釋せんとするこれらの努力から、最も注意すべき印度人の言語學は發生したのである。しかし、一度發達の途につくや、それは決して吠陀の言語のみには蹋躇してゐなかつた、當時一般に話された言語（bhāṣā）であり文章語であつたと考へられる梵語（サンスクリット）の形を、同様に徹底的に、或はむしろより徹底的に、捕捉せんとしたのである。[二]

(一) ヴェスデルゴール、「文獻的に見たる印度史の最古の諸時代について」N. L. Westergaard, Om de ældste Tidsrum i den indiske Historie med Hensyn til Literaturen. 1860, 四四頁——。ソヘールンセン、「印度における言語發達一般におけるサンスクリットの位置について」（王立丁抹學士院刊）S. Sørensen, Om Sanskrits Stilling i den alm. Sprogudvikling i Indien. (K. D. Vidensk. Selsk. Skrifter 6. R., hist. og filos. Afh. III, 3) 1894, 一—一〇節參照。

(二) ヴェスデルゴール、右文獻、六三頁—。ベンファイ、「獨逸における言語學及び東洋文獻學の歷史」Th. Benfey, Geschichte der Sprachwissenschaft und orient. Philologie in Deutschland, München. 1869. 三五頁以下。スヘールンセン、右の文獻、一一節以下參照。

何れの時代に印度人の文法的研究或は考察が始まつたか、これについて我々は全く知るところがない、しかしその最初の足跡は已に非常に古い。この研究が絶頂に達したのはパーニニ Pāṇini

に於てであり、その殘した文法上の著作は眞に我々をして驚嘆せしめずにはおかないもの。彼の在世の時代については今まで議論が若干分れてゐるが、種々な方面より考へて前三〇〇年、或は前四世紀の後半とせらるべき事には疑がないやうに思はれる。その外、印度の文献中には他に多數の文法的並びに辭書的の勞作もあらはれて居り、何れもパーニニより古いもの、新しいもの、また一部は他の學派に屬するものがあるが、立入つてそれらを算へる必要はここにあるまい。(一)

(一) ベンファイ上掲書、三五頁―。〔CHAKRAKVARTI, The philosophy of Sansk. grammar. Calcutta 1930〕

印度人の言語學が到達した高さは誠に嘆賞すべきものであつて、この高度に歐羅巴の言語學が達し得たのは纔に十九世紀の事に止まり、而もそれすら印度から極めて多くを學ばずしては出來なかつた。印度人の文法は、殊にパーニニにおいて明らかな如く、また、彼らの文法の起原よりして豫め期待される如くに、純粋に經驗的なるものに依據してゐた。言語の形を分析し記述はするが、希臘人において屢々見られたやうに、言語や單語の起原或は一般言語原理に關する思辨をこれに混入する事はしない。尤もこの事は印度人にも全くないことではなかつたが、學派によつて多少の差こそあれ、本來的な文法からは除外せられて、全く哲學者に一任されてゐるのが一般の狀況であつた。

印度人の文法は、サンスクリットの形が比較的明晰な爲もあつて、言語構造全體の精緻な解剖的取扱をその基礎とする。すべての單語はその要素——屈折語尾、種々の派生接辭を含む語幹、及び語根——に分析せられる。本質的に動詞的意義を有する語根（サンスクリットで dhātu「基礎」）に可能な限りのあらゆる單語が歸屬せしめられ、しかも現にその言語にあらはれ或は豫想せられる語根の完全な表が既にパーニニ以前から與へられてゐたのである。[一] 印度人のかかる語根の構成には確かにゆきすぎたところもあり、且つ彼らが提示する語根の形は常に正しいとは認められないとは云へ、彼らがこれらの仕事に從ふ際の鋭敏さと徹底性には、我々として常に嘆賞を禁じ得ないのみならず、近代の言語學も實は印度人を知つてより始めて、語根、語幹の如き抽象的な概念を驅つて操作することを學び、近代の言語學に、古い文法學とは非常に異なつた形を與へるに至つたのである事を述べて置かなければならない。——勿論當初は、これらが單なる抽象的概念であつて、事實的存在ではない事を悟らないやうな有樣ではあつたけれども。

(一) 參照ヴェスデルゴール「サンスクリットの語根」WESTERGAARD, Radices linguae sanskritae, Bonnae（ボン）1841. サンスクリットの文典及辭典においては、例へばラテン語の amo「私が—愛する」、fero「私が—運ぶ」などとは異り、動詞は常に屈折を蒙らない形において、即ち印度の文法家の想定した語根

の形において掲げられてゐる、例へば vid「知る」、tud「突く」、bhṛ(或は近代においては一般に bhar の形にて)「運ぶ」、pac「煑る、料る」等々。同様に名詞形容詞も語幹形で擧げられてゐて、我々が他の言語において慣れてゐる如き主格形に於てではない、そして印度の人名が引かれてゐるのも普通この形においてであつて、例へば PĀṆINI, KĀLIDĀSA の如くであるが、實際においてその主格形は -s (-ḥ) に終つてゐるのである。

しかしこの分析は單に背景であつて、その叙述それ自らにおいては反對の道が取られてゐた、叙述は嚴重に綜合的であつたのである。第一の階程は言語の音韻とそれら相互の關係との叙述である。ここで先づ我々の遭遇するのは、一々の音韻の生理學的造成に關する明確な規定であつて、かかる規定のあることは、彼らに特殊な觀察の才能のあつたことを示し、印度の言語學のこの方面を希臘人・羅馬人の同種の試みより著しく高い位置に置き、むしろ近代の業績にも近からしめるものであつた。[1] また音韻の移行關係、親近な種々の音韻の相互關係が精確に叙述せられ、例へば希臘語の λείπω「殘す」、ἔλιπον「殘した(アオリスト)」、λέλοιπα,「殘した(完了形)」、λοιπός「殘

如き〔ει : ι : οι 卽ち ε : αι : ο の〕母音度(vokalisme)の關係——これは印歐諸言語の非常に特徴的な現象である——に對應するサンスクリットの母音關係も、從つて明確に規定せられてゐる(この點に關して希臘の文法家は全然何の記述も殘してゐない)、例へば語根 vid- から、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com